

材木を担ぎながら 最終回 ある阿呆の一生(不思議な自慢の記)

きよ ほうへん
清 方扁

近頃、新木場に来て仕事をしている時の楽しみは日経の新聞小説、伊集院静氏の「よりみち先生」を毎日読むことです。伊集院氏はこれを連載中に体調を崩し中断した期間があり、これで未完に終わるかなと残念に思っていましたら、体調回復して再掲載、私も同時期に体調を崩したので、他人事と思えず、益々愛読しております。

この小説は夏目漱石の伝記ですが、私も若い頃、御茶ノ水の古本屋で十何巻もある漱石全集をどう持って帰ったか憶えていませんが購入したことがあります。当時は全集ブームで、友人の家を訪問すると必ずといっていいほど何十巻もの百科事典が応接間の書棚に鎮座していたものでした。今ならスマホひとつで全部解決するものを、時代は変わっていきますね。あれを捨てるには古紙回収しかなかったでしょうね。

話は戻りますが私は憶えているだけで全集というものは「漱石全集」の他に「高橋和己全集」、「司馬遼太郎全集」この三人にははまりましたね～。それにもう一人「五木寛之」の全集もありましたが、これは女の子にもてようという下心で読んだだけであんまりおもしろくありませんでした。司馬遼の最大傑作は色々ありましようが単純に新選組の盛衰を描いた「燃えよ剣」でいいんじゃないでしょうか。この小説は何度も映像化されましたが栗塚旭の土方歳三と島田順司の沖田総司を超える配役は今でもないでしょう。そんな訳でつい最近まで新選組の旧跡を訪ねて歌の題名ではありませんが京都から函館まで旅したものでした。また東京近辺では大月、調布、日野、板橋、野田、麻布など各所を散歩がてらフラフラ散策、楽しい小旅行でした。

更にさかのぼって古い話になりますが、学生時代に友人と登山(ハイキング)をしていたようです。あるとき二人で新宿発の電車に乗って甲府で降り、南アルプスを望む夜叉神峠へ、そこから近くの桃ノ木温泉で一泊、次の日は小海線と信越線を乗り継いで信濃追分へ、何故こんな50年以上も前の古い事を憶えているかという、最近、断捨離で部屋の片づけをしていたら、この時の旅のスケッチブックがでて



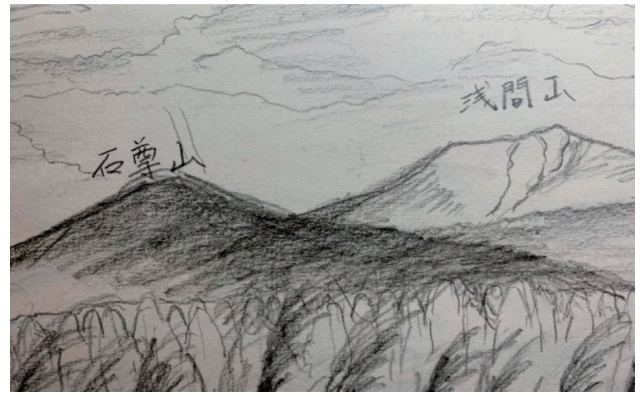
栗塚旭の土方歳三



島田順司の沖田総司



夜叉神峠から赤石山脈を望む



信濃追分から浅間山を望む

きたんです。今になってみると、誰が描いたんだろうと思うくらい、まずまず鑑賞にたえる？スケッチなんです。「純情可憐」な青年が峠や草原で写生している姿を思い浮かべながら、今や恥も外聞もなく、「厚顔無恥」にも最終回ということでこの時のスケッチを載せてしまいました。皆様には本当に長い間、気ままな駄文にお付き合いいただき本当にありがとうございました。

注 高橋和己(1931～1971) 昭和60年代から70年初頭にかけて大学生に最も人気のあった小説家の一人で「憂鬱なる党派」「邪宗門」など著作多数。